

東北 VALUE SIGHT

秋田



鹿角市移住コンシェルジュ（地域おこし協力隊）

木村 芳兼（きむら・よしかね）

1978年10月 神奈川県大和市生まれ

2006年～2016年 パタゴニア日本支社勤務

2015年7月 妻の出身地である鹿角市に移住。同年、鹿角市地域おこし協力隊に着任

この他、2016年NPO法人かづのclassy設立、理事長に就任。秋田県主催ドチャベン2017ベンチャー部門において「サスティナブルyajin campプロジェクト」を提案し金賞受賞。

鹿角市移住コンシェルジュ

（鹿角市政策企画課鹿角ライフ促進班）

TEL 0186-30-1310

かづの
秋田県鹿角市で移住コンシェルジュ（地域おこし協力隊）として活動する木村芳兼氏は、移住コンシェルジュや移住までのプロセスをサポートする「NPO法人かづのclassy」の活動の中で、鹿角の生活や地域の人々の様子、そして鹿角の楽しみ方を伝えることを大切にしている。

木村氏自身が鹿角市への移住者である。もともと地域で暮らししてきた人々との交流を通じて双方向で刺激し合うことをモットーに、自らの経験を最大限に生かし、これから移住を考える人へ鹿角の魅力を伝えている。

地域の人々と移り住んだ人々が 互いを尊重しあい、共に未来を創る

鹿角という地域

自分は鹿角という地域について、その名を聞いたことも、訪れたこともなかった。

アウトドアメーカーで働いていた当時、スノーボーディングが生活の中心になっている時期があった。上質な雪を求めて旅をしながら滑る生活の中で、必ずと言っていいほど東北が目的地となっていたことを考えると、その頃から東北には不思議な縁を感じていたのかもしれない。

その後、偶然にも鹿角市出身の女性と東京で出会い、結婚。未踏の地に縁ができた。そもそも未踏の地には憧れがある。関東で生まれ育った自分が、感覚的に誘われていた地域に好意を抱くのに時間はかからなかった。そして季節ごとに訪れる度に、鹿角という地域に魅了されていった。

サスティナビリティに学ぶ

何度も訪れている中で、鹿角での日常に学べる点が多いことに気が付いた。太古の昔から続く文化や伝統が根付いていること、食のバリエーションが豊富なこと、エネルギー資源も含めて自給できる地域の暮らしに、特に首都圏で暮らしていた自分にとっては、学ぶべきことが多いのではないかと考えるようになった。そして、いつかビジターとして訪れる



首都圏で開催した移住希望者との交流イベント

風の存在から、地域に根付く土の存在として暮らしてみたいと感じるようになっていた。単発的に訪れてその暮らしや営みに触れ、地域の持続可能性を端的に学ぶのではなく、その地に住まい、地域の人々と多くの時間を共有することで、生き方を再定義することが可能のように感じたのだ。鹿角の人々が守ってきた持続可能な暮らしを肯定することで、自分が好意を抱いた地域の人と双方向で刺激し合えるのではないかと、そう考えるようになった。そして、この学びが、課題の多い社会に対して、一筋の光に見えた。

移住は偶然の先に

鹿角市という地域を知ってから5年の月日が流れたころ、まだ仕事を辞めて鹿角で暮らすというイメージを持たずにいたところに、転職となる人材募集の情報を得ることができた。

それは総務省が推進している「地域おこし協力隊」という取り組みで、内容は人口減少がトップスピードで進む秋田県の移住定住事業に携わるといったもの。しかも募集自治体は鹿角市だった。願ってもいないチャンスだった。鹿角市には、すでに関わりを持っている友人も場所も、蓄積されていた。今まで体験していたことが、暮らしてみることによって経験となるかもしれない。そして、自分が経験したことが、どこかの役役に立つかもしれないと思うと、体中をワクワク感が駆け巡った。

希望する企業で働き、大切な家族にも恵まれ、十分幸せに暮らしていた自分のこの選択は、周囲の人からみると、海で例えるならば風の状態からどんな波が来るかもわからない状況へと身を移すようなものだとも映ったかもしれない。しかし自分としては、衝動的だったわけでもなく、さまざまな準備をしていたわけでもなかった。偶然というのが正しいように感じる。そういった文脈で移住をしたのだが、自

分と同じような流れで移住を経験する人も少なからずいると思う。むしろ、たまたま実現したい暮らしやビジネス環境がこの場所にあったから住まいを移した、という本能的な動機の人が多いのかもしれない。

おおらかな気持ちを受け皿に

鹿角で暮らし始めたころは、住民の方から「なんでわざわざ住むの」や「都会の暮らしの方がいいでしょう」などの疑問の声をかけられることが多かった。正直に言えば、自分としては暮らすのにどちらがいいということはなく、都会も地方もどちらも好きで、よほどの事情がない限り、ひとところに住まなくてもいいとさえ感じている。一方で、地域に長く住み、暮らし続けることで地域を支えてきた人々、自治会活動などを通じて地域の安心を保ってきた人々がいる。その培ってきた暮らしの本質に触れてこそ、地方で暮らす豊かさがあると感じている。

かつて、鹿角は鉱山で栄えたという歴史的背景があり、いろいろな地域から人が集まってきている。そのため、外から来る人を受け入れるおおらかな気質があると思う。現に、その気質に助けられ、自分は不安を感じることなく楽しく暮らしている。地域の人には「なぜ鹿角に」と疑問があったかもしれないが自分を承認してくれ、地域の人に承認されたことで人の輪ができ、その輪が広がるにつれて不安は軽くなっていった。

しかし、移住コンシェルジュの活動では、各地の移住担当者が首都圏に出向き、移住希望者を取りあっている状況を目にし、違和感を抱いた。横並びの呼びかけをしても、興味を持ってもらえるわけではなく、何より自分たちとしても楽しくない。こういった経験がヒントとなり、移住するプロセスのサポートに磨きをかけた活動をする事となった。鹿角で暮らす人々の気持ちや日常を紹介し、地域を知らな

い方が飛び込める場、地域住民が新しい何かに出会える場として関われる受け皿を創ることで、地域の魅力の一つとして定義できないかと考えた。それが、2016年12月に立ち上げたNPO法人「かづのclassy」の根底にあるエッセンスだ。

自走していくこと

自分は、地域にもともと住んでいた人と外から来た人が承認し合い、共に未来を描き、行動していく、ということに意義があると思っている。人口減少や高齢化社会など課題が山積する秋田県が考えていくべきことはたくさんあるが、こうした課題にアプローチしていくためには、自走していく仕組みも作らなければならない。ファンを広げていくためにはボランティア活動も必要な要素だが、自走していくためには自主事業を展開し、外貨を獲得していくことも必要だ。そして、次世代にバトンを渡していきけるような魅力的な活動を続け、地域の輪を広げる発信も心がけていきたい。

豊かに楽しく暮らしていけるか。

自分と未来は変えられると信じて仲間とスタートした活動は、始まったばかりだ。



お試し移住ツアー参加者と共に